

# Trial & Error トリアル・アンド・エラー No.67

試行錯誤



(左) 舞台はアンコールワットだった(60年代)



(右) プリマドンナを目ざして  
(芸術学校, 1986年)

## 特集 カンプチア問題とNGO

行き詰まりを打開する	2	手記 クーデターのころ	10
カンプチア問題Q&A	5	帰国できる日を待つ	12
トウル・スレンが象徴するもの	6	タイの仲間たち	13
星野事務局長のカンプチア訪問	8	サヘルを縁に	14
受けつがれた井戸掘り技術	9	ソマリアの日々 友だちはどこにでもいるさ	20

## 行き詰まりを打開する——NGOの役割

JVC事業担当 古西 勇

### 暴力で問題は解決しない

暴力（バイオレンス）と抵抗（レジスタンス）は明らかに意味が違う。しかし戦場においては、自己を正当化するための常套手段として、自らの陣営は敵対者の「暴力」を打ち負かすために「抵抗」していると言われる。

カンブチアの武力衝突の当事者のうち一方の陣営を、西側の報道では「抵抗（レジスタンス）グループ」と言明することが多い。しかし、敵対者から見れば、彼らは「暴力グループ」とみなされるかもしれない。政治家や学者は、どちらの陣営が「抵抗グループ」でありどちらが「暴力グループ」であるという規定を下すことを仕事としている。

あらかじめはっきりさせておきたいのだが、本稿の筆者はそうした立場の人々の見解にはくみしない。

暴力をよしとすれば、人は必ず袋小路に行き詰まる。したがって、非暴力（暴力をよしとしないこと）こそがカンブチア問題の行き詰まりを打開する唯一の手段といえる。真にカンブチア国民の平和を願うなら、いかなる人間も敵とみなしてはならない。反対者を人間として見るができなければ、平和への願いが反対者に受け入れられることは期待できない。これがユートピア物語であるという人は、戦争の当事者か、彼らのどちらかを支援することで何らかの利益を得ている人々、さもなくば暴力是認主義者だろう。

### OXFAMの訴え

今年1月初め、ロンドンに本部を置くOXFAM（オックスファム。イギリス最大のボランティア団体）と他の西側の民間救援団体は、西側諸国の政府と国連に対してカンブチアに対する援助の禁止措置を解くように呼びかけた。カンブチアは世界で最も乳児死亡率が高く、国民が慢性的栄養不良を患っている国の一つであり、西側諸国の援助なしではもはやこれ以上経済発展が望めないというのが、その呼びかけの理由だった。

「OXFAMのような（カンブチア国内で活動する）

民間救援団体は、イギリスを含む西側諸国が最も基礎的な開発援助の供与さえカンブチアに対して拒絶し続けている間に、民間団体としては不相応に過重な仕事に取り組んできた」と彼らは訴えた。西側諸国は、カンブチアの現在のヘン・サムリン政権は侵入者であるベトナム軍により1979年に樹立させられたものであるという理由で、カンブチアへの援助の供与を拒絶してきた。彼らはベトナム軍と戦争を行っている民主カンブチア連合政府を正当な政府として承認しており、国連の決議もそれを反映している。民主カンブチア連合政府は、1975年から78年までの間国土の荒廃をもたらしたクメール・ルージュ（ポル・ポト派）を含んでいる。

ベトナム軍の侵入によるクメールルージュの追放後もカンブチアは広範囲にわたる飢饉に陥っていた。現在ではそのような緊急事態は脱しているが、カンブチアの引き続き窮乏状態は西側諸国から故意に無視され続けているとOXFAMは言明し、民主カンブチア連合政府を「クメール・ルージュの支配下にあり、国外追放された本質的に異なる党派同士の同盟で、カンブチア国内のいかなる領域も管理していない」と評した。

「東側諸国とひと握りの西側の民間救援団体からのわずかな援助では、クメール・ルージュによって引き起こされた荒廃から復興するための十分な資源を供給できない」と彼らは再び訴えた。基礎的なインフラストラクチャーは滅茶苦茶に破壊された状態のままである。かつては米を輸出していたカンブチアであるが、この十年間で干ばつに見舞われやすい地域のために外国からの援助を衰願しなければならないようになってしまった。種と肥料の甚だしい不足は、そのつど援助主要国の寄付により補われてきたが、カンブチアが食糧自給体制を回復することを防いでいる。

上述の発表はタイの英字新聞によって報道されたが、その数日後今度は民主カンブチア連合政府が報道発表を行い、連合政府が「クメール・ルージュの支

配下にあり、国外追放された本質的に異なる党派同志の同盟で、カンブチア国内のいかなる領域も管理していない」というOXFAMの主張を断固として非難した。

彼らは、OXFAMは救援団体としての役割を越えており、タイ・カンブチア国境上のカンブチア避難民を助けることを拒否した、政治的に方向づけられた団体であると評した。連合政府のソン・サン首相によれば、彼は1982年と84年にOXFAMの代表者たちに、カンブチア問題において（国内とタイとの国境の双方に対して）釣合いのとれたアプローチを行うように訴えたことがあるらしい。

その報道発表はさらに、プノンペンへのいかなる助けもカンブチア国内のベトナム軍に対して転用されるだろうと（カンブチアに対する援助の呼びかけを）非難した。

#### NGO 共同声明

カンブチア問題の複雑な事情を一般の人に理解して頂くためには根気のいる説明が必要とされるが、それはまたの機会とする。ここではOXFAMなどの非政治的な民間団体（NGO）が、戦争当事者たちからの非難中傷を覚悟の上で果たそうとしている役割についてその経過を述べたい。

OXFAMとNOVIB（ノビブ。オランダで「食卓のもう一人の客」という貯金箱キャンペーンで知られる民間団体）は、西側諸国の政府と国連が、より人道的な政策をカンブチアの人々に向けて実施するにはどのようなNGOの合同の行動ができるかを議論するため、昨年9月25日アムステルダムにおいてNGOミーティングを開催した。カンブチアに関する国際的なNGOが合計で40団体招待され、結局16団体から24人が出席した。JVCはカンブチア国内で常駐して活動する唯一の日本の団体として招待を受け、筆者が出席した。また、オブザーバーとしてアムネスティ・インターナショナルから2名が参加した。

このミーティングの具体的な一つの目標は、「カンブチアに関するNGOの共同声明（草案）」をまとめ上げることだった。西側諸国の政府代表者が出席する「カンブチアに対する政府援助会議」がニューヨークで開催されることになっており、席上共同声明を発表することになっていたの、各NGOの本部によるその草案について合意が早速に求められた。プノンペンにおいても、その後アムステルダムのミ

#### カンブチアに関するNGOの共同声明（草案）

我々、1979年から86年にかけてカンブチアにおいて活動してきた人道主義団体は、我々がそこで直接経験してきたことを通じ、カンブチア人の引き続く苦痛を目撃し、我々自身の同情と寛大さを代表し、次のような事柄がカンブチア人に影響を与えていることを我々の政府が理解することを求める。

長引いている武力衝突／ポル・ポト政権の遺産／ベトナム軍の存在／国連の援助と西側諸国の二国間援助の停止と差し控え／西側諸国がカンブチア人民共和国を外交的経済的に孤立させていること／

そして、次のような事柄を成し遂げることに對して我々の政府が立場を変更することを求める。

国連におけるカンブチア人の適切かつ正当な代表／カンブチア人が深く恐れを抱いている、クメール・ルージュがいかなる形態であろうとも、帰還するという脅迫を永久に追い払うこと／国連の管理と安全保障のもとにおける停戦／ベトナム軍の撤退といかなる形であろうと、国連以外の軍事介入の撤収／すべてのカンブチア人のための、実質的な政府による救援援助、再建援助、そして開発援助の供与／タイ・カンブチア国境地帯の24万人のカンブチア避難民が難民として承認され、彼らがUNHCR保護下の安全な地帯へ緊急に移動されること／これらの難民として承認されるべきカンブチア避難民の問題の自主的本国帰還、もしくは第三国への再定住を通しての解決／この地域のすべての国々の当然な安全保障上の利益を保障すること

（団体名） アムステルダム 1986年9月25日

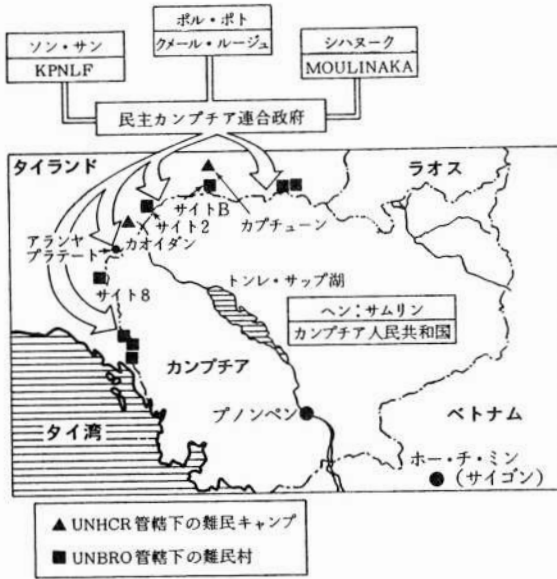
ーティングに参加しなかったNGOも含めて話し合いが持たれた。

JVCはカンブチア国内とタイ・カンブチア国境の難民村の双方で常駐して救援活動を行っているという特殊な立場にあり、結局今回は共同声明への参加を見送ることにした。

#### NGOによる共同出版

アムステルダムでは、それ以外にもいくつかの共同で行える可能性のある行動について話し合われた。その一番大きなものが、NGOによる共同出版物についてだった。1980年から85年までAFSC（アメリカのクエーカー教団）の代表として、それ以降はOXFAMとNOVIBの代表としてプノンペンで救援活動を続けてきた米国人女性エバにより、共同出版物が提案された。

絶え間ないカンブチア人の苦痛と消耗というものに世界の関心を向けさせること。それぞれの国の政府が現実に人道的な政策決定者たちを啓発し促すこ



と。……エバの重厚な話し振りには、カンブチア人に対する並々ならぬ同情と、彼らの苦痛と消耗をこれ以上長引かせてはならないという固い決意が感じられた。

この共同出版物の取材と執筆は今年1月よりエバにより始められたが、必要経費としてJVCを含めた10団体が資金を分担拠出し情報を提供することになった。英語版は4月に初稿を完成する予定だが、フランス語、ドイツ語、オランダ語、フランダース語、イタリア語などに欧州のNGOが、日本語にJVCが翻訳し、9月には出版が行われる予定だ。

### そのころ、タイ・カンブチア国境では

今年1月26日午前11時頃、タイ領内のカンブチアとの国境に近接する約15万人のカンブチア避難民が居住するサイト2（ツ）の敷地内とその周辺に4発の砲撃が加えられ、3人の子供を含む9人のカンブチア人が負傷した。負傷者は70 km程南に位置するカオイダン難民キャンプで赤十字国際委員会（ICRC）により運営される病院に収容されたが、1人が重傷を負っている。砲撃は、国境を越えたカンブチア領内での、ソン・サン派ゲリラ（KPNLF）とベトナム軍もしくはヘン・サムリン軍との間の戦闘の結果として発生したものらしい。サイト2の避難民の多くは、ソン・サン派ゲリラの兵隊の婦人と子供そして初老の親類たちだ。

国連事務総長特別代表であり、カンボジア人道援助担当事務次長補の功刀達朗氏は、彼の代理役と国連国境救援機関（UNBRO）のダイレクターを率いて砲撃のあった跡を見て回り、病院の負傷者と面会した。1月28日功刀氏は全ての救援団体を代表して、

戦争の全ての当事者たちに国境沿いの難民村における軍事行動全部を控えるよう訴えた。

国際救援団体は、難民村特にクメール・ルージュの支配下にある難民村において、非戦闘員から戦闘員を分離することに力を注いできた。功刀氏は、非戦闘員からの軍部の分離は「カンブチア人の非戦闘員の人間的苦しみと、彼らの不安定な生活を緩和することに大変寄与してきた」と発表した。しかし、「今回の事件は、タイ・カンブチア国境沿いにいるカンブチア避難民が引き続き潜在的危険にさらされているということを証明している」と功刀氏は発表した。

今回の砲撃は、2年近く前にサイト2が設置されて以来最初の危険な事件であったが、戦争をしているどちらの陣営が発砲したのかに関しては何も公式の発表はなかった。

話変わって、戦争の一方の当事者であるKPNLFからは、今回の砲撃はベトナム軍によるものであるという報道がなされている。西側の良心的な報道機関が、果たして戦争の当事者の主張をどこまで真に受けて報道するかは非常に重大な問題といえる。いつの時代でも敵のイメージを作る仕事は戦争に役立つものだ。

しかし、非暴力の立場に立てば、問題はどちらの陣営が発砲したかではなく、避難民である非戦闘員から軍部が未だに分離しておらず、戦争の犠牲者として避難民が巻き込まれるような状況を軍部自身が作っているということだ。もちろん、戦争の当事者たちは同等に非難されるべきであり、一方の当事者だけを非難しようとするような政治的な態度を筆者が取ろうとしているわけではない。

タイ政府はカオイダン難民キャンプを昨年末閉鎖し、今年になってキャンプ内のカンブチア人をサイト2やサイトBへ移送する計画だ。サイト2に限らず、国境に隣接する全ての難民村は、非戦闘員から軍部が完全に分離しない限りいつでも砲撃の標的になる。

「恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利」（日本国憲法前文2項）は全てのカンブチアの人々の上にもあるはずだ。暴力は「行き詰まりを打開」することができないことに、そろそろ気づいてもいいのではないか。そんな呼びかけは、一人であれば虚空に響くだけかもしれないが、一人でも多くの方がその呼びかけに賛成してくれることを心から希望する。

# .....カンブチアに関するQ&A.....

**Q.** OXFAMの発言はかなり政治的に踏みこんだものと思われませんが、これは援助団体としてのわくを越えていないでしょうか。

**A.** OXFAMの主張は、基本的には、この十数年間にわたって、戦争、内戦、革命によって苦しんできたカンブチアの人々への共感に根ざすものとして、支持できると思います。OXFAMは1979年以來カンブチア国内での救援と復興に集中し、タイ側での難民救援には参加していません。その背景もあって、カンブチアの政権の正統性、承認問題まで含めて、踏みこんですっきり発言できるわけです。

英国社会と日本社会の世論の違いもありますが、タイでの難民救援とカンブチア国内での復興救援の両方を志すJVCとしては、政治についても日頃十分考えつつ、政権の正統性の選択まで発言する必要はないと考えます。

**Q.** カンブチアに2カ国間援助が再開された場合、援助による弊害の心配はありませんか。

**A.** 二国間援助が再開される場合、カンブチアの経済力の現状を考えると、借款ではなく無償援助でなければなりません。借款の場合も、相当長期低金利でカンブチア側に有利なものでなければ、短期間には返済できないのは明らかです。

援助による弊害としては、次の三点、農業、資源、公害について不安を感じます。カンブチアの農業は、メコン大河、トンレサップ湖周辺の比較的豊かな地域と、それ以外の地味の乏しい所に分かれます。いずれにしても、現在使用している化学肥料、農薬の量は少なく、有機農業に近い形で耕作されています。援助が入る場合でも、「大量」・「急激」を避けて、短期の収穫率向上を目指さず、土壌を大事に永久的に使用する、伝統的な農法が続けられて欲しいと思います。

また、近代工業の産物（自動車やテレビや）とひきかえにカンブチアの森林が破壊されたり、「安い労働力」やきれいな環境を求めて、「二国間援助」と共に、悪徳企業や公害企業が日本からカンブチアへ「輸出」されることを心配しています。

直接の活動とは別に、私たちがあらかじめ、資源問題や「工業的農業」の弊害について助言や情報をカンブチアの人々に提供できるという協力のし方もあると思います。

**Q.** JVCのプロジェクトは“カンブチアの人々への総合的人道援助”といわれていますが、自動車や井戸掘り機械、灌漑ポンプの修理のためのワークショップは開発に関するようにも思われますが。

**A.** 救援のためのワークショップは、ユニセフ、OXFAMに次いでJVCのものが3つ目になります。いずれも農村地

帯での井戸掘り給水、保健活動を成り立たすために、必然的に必要となったものです。つまり道路状況が悪く、交通輸送手段も不十分なため、自前でその部分も確保しなければ、活動自体が行えないのです。アフリカの多くの地域の救援でも同様のことが言えましょう。

社会自体が大規模な破壊で「開発」以前の状態であること、また私達の活動が「工業化」ではなく、救援を志した小規模なものであること、この二つの理由で数年後はともかく、現在は「開発」に貢献できるはるか以前だと思えます。

**Q.** ベトナム軍がカンブチアにいたことがカンブチアの復興を遅らせていませんか。ベトナムが手を引くことで西側の援助も入りやすくなると思いますが。

**A.** 私個人の意見ですが1979年、ボル・ポト政権崩壊の時点で、カンブチアの民衆はベトナム軍に感謝の気持を持ったと思います。強制労働と収容所からふつうの、人間らしい生活にもどれるようになったわけですから。「解放」後8年経つ今、ベトナムは「ボル・ポト」派の脅威の問題も含め、問題を積極的にカンブチアの人々に委ねていく方向を摸索すべきだと思います。またベトナムがベトナム軍の撤退によって生ずる「空白」について心配しているなら、これも積極的に国連や、スウェーデン、オーストラリアなどの中立国に依頼し、活用していく方向で解決したらよいと思います。

**Q.** カンブチア国内の情報は限られており、なかなか現地状況が伝わってきません。一般の人でもカンブチアに行くことができますか。

**A.** タイやオーストラリアの旅行者が中心になって「アンコールワット・ツアー」が再開されました。これに参加するのも一つの方法です。他に個人で写真家、牧師、僧侶の方々が訪問しています。カンブチア外務省に電報で連絡し、電報で返事をもらって入国しているようです。JVCでは一年に一回ぐらいスタディ・ツアーを企画するつもりです。一番のネックは宿舎が非常に限られていることです。

また富士国際旅行社がカンブチアツアーを扱っています。4月29日出発、10日間、38万9000円だそうです。4月にバンコク-ホーチミン間の便数が増えると、7~8日間、34万9000円になります。詳しくは下記でお尋ね下さい。

〒102 東京都千代田区飯田橋4-4-1 中橋ビル  
TEL 03(230)0811 富士国際旅行社(山口さん)

バンコク駐在の特派員など最近ではカンブチアへの入国も多く、新聞や雑誌のカンブチア関係の記事は増えていると思います。



## トウル・スレンが 象徴するもの②

闇の中の時代

熊岡路矢

### 得たいの知れない政権

ボル・ポト政権とその時代が理解しにくい理由として、発表された文書が非常に少ないこと、憲法など公表されたものの内容の抽象性がある。例えばカンブチア共産党の存在と「民主カンブチア」国が社会主義であることなども、政権末期1977年のオリンピック競技場でのボル・ポト演説ではじめて明らかにされた。それも各地域で農作業などの重労働に従事していた、多くの国民には詳しい情報は届かなかった。その証拠にカンブチアの一般の人々は、難民となった人も含め、自分達の国家の体制や政府、議会、党の指導者についてほとんど知らなかった。

シハヌークは1971年北京における、ラクチュール(仏人ジャーナリスト)のインタビューに答え、「自分は革命後、国家元首となるだろうが、やがてクメール・ルージュは私を桜んぼの種のようにポイと吐きだすであろう」と述べているが、事態はその通り進んだ。カンブチア民衆にしてみれば、1975年の革命は、シハヌークの名前により成就したものの、王子の仮面が剥がれてみれば、得体の知れない体制が現れたわけである。

### カンブチア共産党の流れ

まず革命の主体であった、カンブチア共産党について考えてみたい。カンブチア共産党は、大きく分けて、次の三つのグループにより構成されていた。

① 1950年代から闘ってきた、インドシナ共産党の流れを組む。古くからベトナムの共産主義者・民族主義者と共闘してきた、旧人民党の社会主義者達。(ケオ・ミア書記長、ケオ・マニ書記長など)

② 1960年代から辺境の地を拠点として、農民の一部を組織し闘ってきた当時の主流派(ボル・ポト書記長、イエン・サリなど)。

③ シハヌーク時代に、シハヌークの率いるサンクム(人民社会主義共同体)に左派として参加し、政権



の経済関係大臣にも就任した、キュー・サンパン、フー・ニム、フー・ユオン(フランス留学・博士号組)を含む左派インテリ社会主義者。このグループの人々は、シハヌーク政権末期(60年代後半)に弾圧を受け、ジャングルに潜り、②のカンブチア共産党＝「クメール・ルージュ」に合流した。

一方シハヌークおよびその派は、ロン・ノルに追放されてから(70年3月18日)、かつて自ら弾圧した上記各派の構成する解放勢力に後から参加した。彼らは軍事的基盤も無かった。その結果、国際的・国内的な知名度、農民の広範な支持を受けていたにも拘らず、75年の革命と革命後の政権において大きな影響力をもちえなかった。

### 悲劇はなぜ起こったか

革命後、民主カンブチア＝ボル・ポト政権がトウル・スレン治安本部「政治犯収容所」に象徴されるような、極端な報復的強圧的支配策をとった理由として、以下の要因が指摘できると思う。

<ボル・ポト政権の性格形成の特徴(～75)>

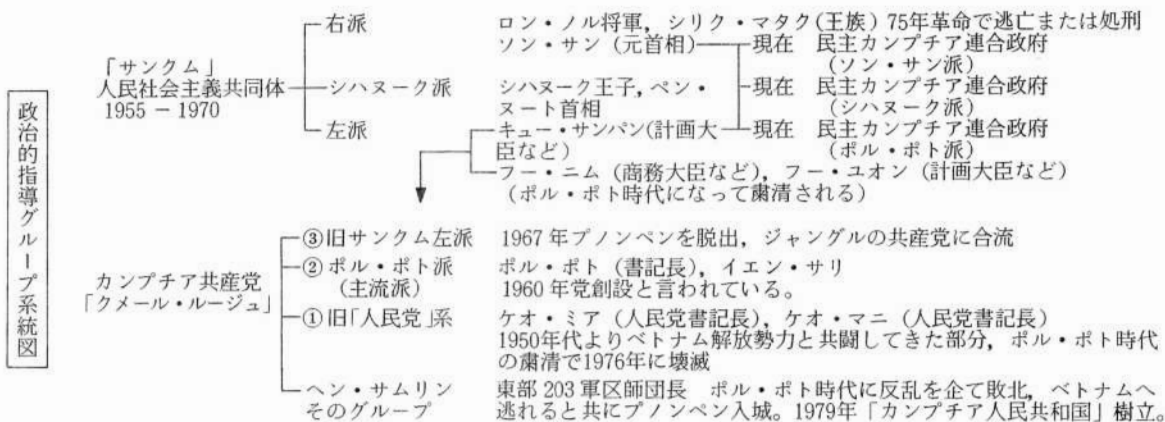
●ボル・ポト派は長期間辺境の地に拠点をおき、直接的には貧農・極貧農に支持層を求めた。「味方」をせまく限定し、中間的立場(実際にはロン・ノル派でもボル・ポト派でもない、この層が多いのだが)を認めなかったため、必然的に多くの人々を「敵」と「潜在的敵」としてとらえるようになった。

またこの間孤立した環境で自己形成していった結果、他地域の人々のあたりまえの感覚というか、「常識」を遠く離れ、そして「外世界」＝都市や外国一般への反感と疑心暗鬼を募らせた。

●長期間におよぶ内戦で、ジャングルや農村で苦しい戦いを続けるうちに、自派の戦闘員や民衆が多数死傷した。特に米軍による激しい空襲による犠牲を目の当たりにして、報復の気持ちを強めたようだ。その結果、ロン・ノル派の幹部のみならず、非支配地

### カンブチア現代史略図と政治的指導グループ系統図

年代	19c～	1941	1945	1953	1970	1975	1979～
支配者	仏植民地時代	日本軍占領	仏復帰支配	完全独立 シハヌーク	ロン・ノル	ポル・ポト	ヘン・サムリン
国名	カンボジア王国				クメール共和国 (米国)影響	民主カンブチア (中国)	カンブチア人民共和国 (ベトナム・ソ連)
時代の特長	反帝独立闘争の時代			平和と中立の王制期	内戦期	革命期	復興期



域の農民, 都市住民, インテリ, 中産階級全体をも抹殺の対象と考えるようになった。(内戦時, カンブチアが受けた爆弾総量は50万トンを超え, 大戦中日本が受けた量の3倍以上である。現在でも爆撃跡は, 乾季はクレーターとして, 雨季には大きな「池」として無数に確認できる)

●ポル・ポト派は, 最高幹部は少数のフランス留学組のインテリで固めたが, 中堅幹部など実働する部分には, 文字の読めない無学の者や年少者(こども)を不均衡なまでに重用した。このため党内では「上意下達」の非民主的な独裁的な傾向が強まり, 被支配者や「敵」と見なす者に対しては, レベルの低い, 場合によっては野蛮な取扱いが一般化する要因になった。

このことは, 後のトゥル・スレン「政治犯収容所」における逮捕から取調べ, 処刑にいたる過程で示された冷酷さ, 残酷さに典型的に表れている。正式の裁判のシステムが無かったことはもとより, 「容疑者」=有罪, 有罪=死刑という原始的な単純さのなかで, 人権のかけらも認めないような体制の成立つ下地でもあった。

そして, 最終的にはベトナム共産党および, これと共闘してきたカンブチア人共産主義者を, 意見の異なる「同志」というより, 「敵」として位置づけた。このことに関しては, 領土問題・国境紛争, および中国共産党との関係が深く影響している。

#### <革命過程での変容 (75~78)>

75年の革命は, 形のうえではカンブチア共産党とシハヌーク王党派の共同で勝利した。この両勢力が真に協力したなら, 当時のカンブチアにおいて一応安定多数支配と言えたであろう。しかし革命の過程で, 極端な政策と「唯我独尊」的性格を持つポル・ポト派は, 革命の勢いを利用して権力の独占を図った。まず思想的に大きく異なる, シハヌーク派を実権から完全に外し, 無力化した。相前後して, ベトナムとの関係等で意見の異なる, 旧「人民党」系黨員などベトナム派と見なしたグループを一掃した。

さらに旧サンクム左派の優秀な理論家黨員(フー・ニム, フー・ユオンなど)のグループが, ポル・ポト派の紙幣や市場・都市の廃止, 経済政策, 弾圧に反対した事を理由に, これらの人々を粛清した。

この時点で, カンブチア革命は, シハヌーク派の抜けた左派少数派の革命から, さらにポル・ポト派という極少数派の, 内外からの批判を一切寄せ付けない, 「私物」的なものへと転化していった。ロン・ノル体制や米国に対する「憎しみ」や「恨み」をエネルギーに転化して, 革命までこぎつけたものの, 権力をとって以後ポル・ポト派は, 自ら怨恨と反抗の種子を蒔き散らしていった。抵抗の広がりにより強力な暴力でしか抑えられず, この悪循環は最後にはカンブチア民族の崩壊の危機の深みにまで至った。

(完)



## 星野事務局長カンブチア訪問

'86・10月23日～30日

4月の開校に向けて、ワークショップ/技術学校の工事が着々と進められている。JVCのプログラムも給水活動、孤児院の補修、プノンペン市のクリーンナップ・キャンペーンへの協力と総合的になり、救援団体としてのJVCがプノンペンでも認められるようになった。

しかし現在はプログラム単位の認可であり、正式に団体として事務所を構えているわけではない。今回の事務局長の訪問によってこのような現状を打開しようとした。その成果として今年中には事務所開設の見通しがたったようだ。

なお今回の訪問に際してはT/Eの元編集長である本橋栄と現編集長の前川昌代が同行した。

### 10月23日

予定より少し遅れてICRC（赤十字国際委員会）のチャーターしたベトナム航空機はプノンペンに着いた。ホーチミン-プノンペン間は毎週木曜日のこの便しかないため、木曜のポチェントン空港は出迎えや見送りの援助関係者の社交場ともなっている。

### 10月24日

JVCのカウンター・パートである運輸省自動車輸送局を訪問した。ここを初めとしてカンブチアの省舎はどこも町の集会所とか市役所の分室といった趣である。役人も（社会主義国だからほとんど役人なのだが）いんぎんなところがなく、気さくというより誠実さに心打たれる。

ワークショップ建設予定地は運輸省のトラック置き場の一角にあった。動かなくなったトラックが百台以上も野ざらしになっていた。

### 10月25日

プノンペン市清掃局訪問。プノンペン市が今1番頭を抱えているのが、ゴミ処理問題と街の美化対策である。人々がプノンペン市を放棄して以来街は荒れ放題になっていたが、現在は市民たちの早朝清掃などで公園などのゴミは取り除かれた。しかし市民が毎日出すゴミは窓から棄てられたり、道路に掃き出されたままで収集もままならない。JVCは市当局のクリーンナップキャンペーンに協力し、ゴミ箱の

用材を送った。現在は清掃車を探している。

### 10月26日

日曜日なので公的な訪問はお休みし、ピクニックにかけた。ちょうど仏教の祭日にもあたり、行楽地は休日を楽しむ人々でにぎわっていた。行楽地といっても海の家のような休憩所がたち並び、屋台があるぐらいである。今のカンブチアには個人の車などほとんどないが、ピカピカバイクの駐車場があるのには驚いた。

### 10月27日

OXFAMのランドクルザーで一路東に向かう。このまま真すぐ進めばホーチミン市である。路面の傷みはかなりひどく、油断をしているとあちこちに身体をぶつける。

プレイベン州では養田さんがかつて掘った井戸を見てまわった。養田さんの技術は確実にカンブチアの人に伝わり、今も新たな水しぶきを上げている。

### 10月28日

朝からUNICEF、保健省、文化・情報省、教育省を訪問。午後7時からサマキホテルでJVC主催のレセプションを開いた。このような場は楽しみであるとともに事実上の情報交換の場になっている。

### 10月29日

思いがけず芸術学校で伝統舞踊を見学することができた。生徒たちのほとんどは孤児という。基本動作の習得に6年かかるというが、小さいころからの訓練が必要なのだろう。彼らのダンスはどれもきびきびとして素晴らしいものだった。カンブチアの文化も少しずつではあるが復元しつつある。

午後、外務省訪問。私たちを出迎えて下さったウッキマン氏は、生存している2人の外務経験者の1人である。彼はカンブチアの置かれた現状について説明し、私たちに支援を求めた。星野事務局長もJVCオフィスの認可を求めた。

### 10月30日

来る時と同じ木曜日、今度はカンブチア航空でホーチミンに向かった。窓からは冠水した平原とメコンの濁流が見える。雨期はもう終わりだった。

(前川)

## 受けつがれた井戸掘り技術

JVC事務局長 星野昌子

### 3回目のカンブチア

私がカンブチアを訪れたのは1968年、1982年、そして今回の1986年10月が3度目であった。1回目は種々の問題を内蔵しつつも外目にはカンブチアの豊かさを代表すると見えた年であり、シハヌークの統治下にあった。10年余り後にしのびよる地獄さながらの日々を誰もまだ予想できなかった頃のことである。

2度目はヘン・サムリン政権誕生後2年を経たばかりで、プノンペン郊外には無数のドクロが石ころと共に容赦もなく陽にさらされていた。

そして今回はそれから4年。まだいたる所に往時の傷跡を残す街や農村であらゆる苦難を克服しつつ復興に励む人々がいた。家族ともども、休日には河辺のヨシズ張りの棧敷で焼鳥を頬張り、肥った家畜の群が行き交うようになったのを見た。

僅か20年足らずの間にこの国の人々に襲いかかった激動の日々を私はいずれも訪問者として短い滞在の間に垣間見たに過ぎないのだが、それでも尚余りに感動的なのである。

以上のことを私は今回カンブチアで会う人毎に話した。と言っても私はクメール語ができないので、フランス語や英語で伝えた。68年の頃「カンブチアは豊かですね、素晴らしいですね」と仮に私が誰彼となくつかまえて言ったところで、人々は「ええ、そうなんですよ、私の国は」と、当り前のように言ったに違いない。2回目の時、人々は余りにも深く傷つき、悲し過ぎたから、かつて古き良き日々を訪れたことがあることさえ言い出し難かった。今回、いたわしさの中にも復興の兆しを眼のあたりにして、68年に私が見た平和な頃のカンブチアを話したかった。

### 芸術学校の支援を

今回私が当時の思い出を話すことが出来たのは殆んどが運輸省・外務省・文部省のお役人方であったわけだが、皆さん喜んで下さり、クメール語しか理解しない人に通訳して下さったりもした。逆境に在って自国の文化に誇りを持つと言うことがいかに人々の心を支え、力を与えるかを改めて

思い知らされた。そのことはとりもなおさず、JVCのカンブチアプロジェクトにおいて、ワークショップ/技術学校、保健栄養と並んで小規模ながら始められているECOLE BEAUX ARTS（芸術学校）支援を、この方面に造詣の深い方々と連繋を取りつつ、息長く続ける必要性を痛感したわけである。

10月29日、私達に予期せぬ幸運が訪れた。USSRからの賓客と同席して上記の学校の生徒さん方が演ずる出し物の数々を心ゆくまで堪能することができた。まだ幼な顔の踊り手の厳しく仕込まれた身体の動きに、18年前のアンコール・ワット寺院の舞姫が二重写しになった。

### ふきとんだ不安

もう一つ感激したのは、ブレイヴェン州のネアック・ラン（首都から東へ約100キロ）を訪れ、かつて箕田健一さんから井戸掘り技術をゆずり受けたクメールの方達が、水を掘り当てた現場を見せていただいたことだ。

今を去ること5年前のMIRC（モラロジー国際救援委員会）の理事会で、「日本人が手を引いたらそれ切りになるのではないか」「クメール人に機械の保守ができるだろうか、壊れて修理する人もなく捨てられるのでは」等のご質問に、「ご心配には及びません。信じられる人々です。是非ご許可いただきたい」とお答えしたものの正直に言えば一抹の不安が拭き切れなかった。そのような不安も今回人々の見守る中、吹き上がる水柱に乗って雲散霧消するのを覚えた。「立派に稼働している」という報告は何度も受けていたのだが、やはり百聞は一見にしかずなのである。小泉先生初めMIRCの方々が勇断を下されたことは誠に幸이었다。MIRCのみならず、当時まだカンブチア国内への協力について理解する人が少なかった頃からご支援下さった方々に改めて感謝の意を表したい。それなしにはJVCのカンブチアプログラムはここまでこぎつけることはできなかったに違いない。

## クーデターのころ——平和の終焉

元カ・日友好医療センター医師 小野正道

### 看護婦来たる

1970年1月下旬、カンボジアに奇妙な噂が流れた。にせ札が出まわっているから注意せよと、宣伝ポスターまで貼り出された。

出所はタイ方面という。タイに近いモンコルボレーの町では、私たちの使用する500リエル札は、必ず透かしてみても受けとられるといった不快さだった。ポスターの説明も、どの部分が0.1ミリであるといったあやふやなこと。間もなく新札が出たが、交換劇こそまさに政府の失態で、幼稚さに呆れた。

……何かが起こる……。この頃シハヌーク殿下は外遊中であった。不在中の野心家たちの策謀に相違なかった。

不穏な情勢に私は焦った。看護婦の着任が迫りつつあった。中止を要請したが、日本の役所の狭量性、臨機応変の処置など望むべくもなかった。

3月8日(日)二人の看護婦が到着した。なぜか団長格のT医師以下、私を除いて全員看護婦の派遣を望んでいなかった。彼らと同じ宗教を持たない自分の意見は、なかなか受け入れられなかったのである。

私は幼い頃あまりにも貧乏で、禅宗の寺で育った。僧侶にならずとも、これほど人との交わりに差別があるとは思わなかった。到着した以上守ってあげよう……。私の決心であった。

3月15日(日)どこにも案内してやれなかった2人を、早朝アンコール・ワットに連れて行った。私のスタイルは下半身越中禪の、ランニングシャツ。ただし車に入ってからズボンを脱ぎ、降りる時にはく。どこに行くにもこの方法をとった。

「先生、あんまり出さないで下さいな……」助手席のI子さんは、車の猛スピードに少々弱音を吐く。

「心配しなさんな。いつもこのスピードで通勤のようにゆき来しているから」

「いいえ、あの、スピードじゃないんです。先生の物、先ほどから転げ出ています」

「!? ……!? ……。余計なところは見るな。まっすぐ前を見ていなさい」



2人の看護婦さんと

後席でS子さん、大声で笑い出す。

2人は、初めて見る石の大殿堂、アンコール・ワットの壮大さに圧倒されていた。この日は日帰りだった。

### クーデターだ!

3月18日(水)午前11時。医療センターの食堂で、班員6人が昼食の椅子についた時だった。私を中心にI子さん、S子さん、対面はT医師を中に左右に1人ずつ。残る1人は近くに家族と住んでいた。3人対4人と、私はグループ別になることを好まなかったが、T医師が狭量のためかそのようになったのである。

医療センターの拡声機が音量一ぱいになりたてた。職員も外来者も騒いでいる。女中のサボンとテン(2人でサボテン)は実におびえている。

「サボテン?」

「はいそうです。シハヌークはだめです」

遂に起こるべく事が起こったか、これが実感であった。T医師は「なあとカンボジアは何も変わりませんよ。単なる交替劇で、すぐ治まりますよ」私はもう何も言わなかった。

昼食後2人を自室に呼び入れた。

「I子さんもS子さんも覚悟を決めなさい。T医師にはわからん。ベトナムと同じにならないことを祈るけど、けして軽々しい行動に走らないようにね」

無理もない。戦争がどんなものか、2人にはわからない。

3月21日(土)2回目のアンコール・ワット行き

## 平和だったころのプノンペン



である。今回は1泊した。

アンコール・ワットの遺跡とは、いくつもあり、2日や3日ではとても見物しうるものではない。プノムバケン、アンコール・トム、バイヨン、タプロン、ネックペアン等、大小あわせて20カ所以上もある。

出発少し前に、T医師が親娘3人車で来た。ははあアンコール見物だな。3人が何もいわずに出たあと、私たちも出発した。

前回、検門所は1カ所もなかった。それが今回は3カ所も設置され、通行する民間車をチェックしていた。これだけでも2人にはクーデター以後の厳しさがわかる。加えて19日以後、商店から商品が一せいに消え去った。各家庭に挙げてあったシハヌーク元首の写真も一せいに降ろされた。

ベトコン、といっても、カンボジア人同志センターのタン・センギン師が、外出の際着用するようにと、「赤十字腕章」を渡そうとしたが私は拒否した。「傷病者はいかなる人でも敵味方はない」拒否の理由だった。

### 戦争の激化

4月に入って親友だった青年医師、カーボンも応募され、私の手を固く握り涙をポロポロ流して別れていった。美人の妻君との不仲を何とか仲直りさせようとつとめたが、遂に果たせなかった。妻君はいつも私を訪ねては頼みこんだが、彼はどこに消えたやら、私と会っても黙ってどこへともなく消えてしまった。彼はその後戦死した。

5月になると、合弁会社のK氏がゲリラに虐殺され、日本人の間に動揺を与えた。プノンペンとの連絡も多くなり、医療センターには薬物も少なくなった。日本から3月中には届くはずだった物資も絶望的となった。

医療センターの班員も半数が出動しなくなったが、患者は相変わらず多かった。2人の看護婦はよくや

っていたが、患者が多すぎるので奇策を取った。

患者を一列に並ばせ問診し、頭痛、腹痛、歯痛は看護婦のみで帰した。腹痛には仁丹がよかった。下痢には正露丸が効果的で、頭痛、歯痛にはグレランやセデス、これだけで患者は減った。

5月11日、緊急指令で大使公邸に集合した。婦女子総引揚げ……。だがこの2人の看護婦は医師と同じように専門家扱いで、婦女子の中には含まれていなかった。

すでに2回ほど今後の対策会が開かれ、残留組と打ち切り組に二分された。私は2人の看護婦と残留に決まっていた。

しかし、農業センターには日本人家族がいる。一刻を争って、この事態を伝えなければならない。

クーデター以来2カ月にして政府軍は撤退し続けた。永くは持つまい。これ以後国民は真正面からの戦禍の犠牲になるが、紙面の都合によってペンを置く。

### 一粒の夢——平和へ

今回（'87 4月）の訪問は十数年ぶりとなる。私のカウンターパートであったソク、カーンも生き残っているようだ。私が授けた技術は死の恐怖を経てもきっと覚えているに相違ない。どんな気持ちで待っているのだろうか。

何としてもその技能を思い出し、カンボジア復興のために役立せてほしい。たった一粒の夢であっても……。一粒の夢がカンボジア再建の基礎になるように、できる限り援助したい。

日本はASEAN諸国に同調して、カンボジアを依然として頑固に否認し続けているが、逆効果である。ベトナム軍の撤退を強調するが、ボル・ポトによる虐殺の事実をカンボジア国民は忘れないだろう。とにかく平和だった1960年代に早く戻りたいものである。



## 帰国できる日を待つ

元留学生 ペン・セタリン

長く日本に住んでいると、一瞬自分がカンボジア人である事を忘れてしまう。ずっと忘れてしまったら困るが、反面自分にとって一番いいのかとも思う。というのは、その方がカンボジアの問題を考える時には冷静になり、効果的な問題解決の方法が見つかるかもしれないからだ。

シハヌーク殿下の時代、私たちはとても楽しい子供の時を送った。子供だったから深い問題を知らなかったのかもしれないが、両親は私たちがりっぱな人に成長してほしいと期待し、私たちもそれを感じていた。自分一人が幸せになればそれでよいとは思ってほしくない、いつも両親はお説教した。私が登校拒否を起こすと、主婦になって一生養ってもらうのかと、同じ文句を言われるのはいやだった。それにあまりにも夢がなさすぎる。

バカロレアを取った後は本当に充実感を感じた。大学は好きな科目ばかりだったし、一日中同じ場所で先生の講義を聞かなくてもすんだからだ。でもその時期は、ロン・ノル軍とクメール・ルージュとの争いが激しくなっていた頃であった。プノンペン市内は国境から逃げてきた人々の難民キャンプにもなっていた。毎日ロケット弾が落ち、日がたつにつれて死んでいく人が多くなった。政府は逃げて来た人々に対し何も手を打たなかった。インフレで物価が高くなり、することもないそれらの人々は食べ物にも事欠くようになった。町全体がとても悲しかった。私たちは、どちらが勝ってもよいから早くこんなことは終わってほしいと思っていた。戦争ほどばかばかしいことはない。

その頃は、「あと一年たてば戦争が終る、そうしたら日本の企業の進出が多くなるので、未来は明るいですよ」というわさがあちこちから聞こえてきた。ちょうど私の日本への留学の話が決まった時であった。私はいっそう夢をふくらませて、日本に行ってから計画をやたらに書き出した。

まず難しい日本語の文字も会話も一生懸命勉強すること。日本の文化、風土、習慣も一生懸命に理解すること。それを最低の条件として身につけようと決めた。カンボジアに進出する企業のため、そして

カンボジアのためにはこうした人材が必ず必要になる。たとえ企業に勤めなくても、必ず日本とカンボジアの架け橋として、なくてはならない人材になるだろうと思っていた。日本の発展の全ての原因を本で研究したり、日本の友人から聞いたり、何でも積極的に参加し、日記にまとめていた。しかし留学も終わり、現在まで待っているが、帰国する日はやってこない。

カンボジアは今どんなふうになっているんだろう。安定してきたと伝えられるが、私たちにとても素直に受けとめられないのである。

ベトナム人がカンボジアを占領している限り、反ベトナムのカンボジア人は抵抗する。抵抗すると国が安定しない。また戦争である。人々は衣食住に困り、安心して暮らせない。孤児、未亡人、障害者が増える。それに波尔・ポト政権の後遺症に加え、今のカンボジアは私が日本に来る時の74年よりもひどくなっているに違いない。波尔・ポト政権になった時国造りのために帰国し、死んでしまった2人の同期生のことを思い出すと、帰国することがとても不安になる。

しかしいずれ帰ることになるだろう。もし今帰っても殺されないという保障がついて、やりたいことをやらせてくれるのなら、私は次のことをしたい。(現在は私には無理なので、JVCの熊岡さんや箕田さんが私の代わりにやっていただければ、どんなことでもお手伝いしたい)。

- 日本の企業の進出によって、仕事を得る機会をカンボジア人に与える。
- カオイダン・キャンプの技術学校のような技術指導センターを設ける。(これは既に計画が進められている—編集部)勉強する期間中は最低限の生活費を支給する。このためには日本人に<里親>になってもらうということも考えられる。

何ととっても一日も早くベトナム軍が撤退し、カンボジアが独立すること。そして自分の国に帰ったカンボジア人と日本人がいっしょに働くのが一番だ。その日を待つしかない。

# タイの仲間たち

## ノンチャン



- ① 蓮尾慶治
- ② 1962年4月13日
- ③ 千葉県
- ④ 1985年4月3日
- ⑤ 学生
- ⑥ 世界の矛盾を変革できるような組織で働

てみたかったから。

- ⑦ 会計
- ⑧ JVCは発展中の団体だ。目的は良いと思うが今何かを変えるために、数多くの人をまきこめない。JVCが必要とするのは、変革のために多くの人を呼びこむことだと思う。
- ⑨ こちらの人との関係をつなぎながら、日本で活動を続ける。
- ⑩ 海外、特に第三世界で活動するとき、現地の人をよく理解し、その国の人々に合わせて活動をするということにあまり注意が払われていないようです。また自分の価値観を押しつけてしまい、彼らの本音を聞くことができず、反発される場合もあるので、その点に十分気をつけながら活動すべきだと思っています。ほかにはタイで起こる問題は、今後他の地域でも十分起こりうることなので参考にして下さい。東京はタイのことで神経質になりすぎているくらいがあるように見えますので。

(87年1月まで)



- ① ソムサク・ヴィアンヤンクン
- ② 1961年12月4日
- ③ タイ
- ④ 1985年8月26日
- ⑤ IRCで1年間働き、そしてバンコクで倉庫

管理をやり、その後JVCに移った。

- ⑥ 私はクメール人のために働くことが楽しい。長い間、彼らとともに働きたいと思っていたし、ボランティアについてよく知っていたので、JVCで仕

- ①名前 ②生年月日 ③出身地、国籍 ④JVCに入った、あるいは活動に参加した日 ⑤JVCに入る前は何をしていたのか ⑥なぜJVCにかかわったのか ⑦仕事の内容 ⑧JVCについて感じていること、または提言 ⑨これからどのようなことをしたいか ⑩ほかの国で働いているメンバーに伝えたいこと。

事をしたと思った。

- ⑦ ノンチャンのサイト2で倉庫と調理場の管理をしている。ドライパックの配布とUNBROの倉庫からの食糧調達もするようになると思う。
- ⑧ JVCで働くようになってから誰とでも楽しくやれるので、JVCで長く仕事をやりたいと思う。
- ⑨ JVCが引き続き、難民や貧しい人のために働いてくれることを望んでいる。援助することはたくさんあるのだから。もしこれからもこのように働くことができれば、それはJVCにとって非常に素晴らしいことだと思う。
- ⑩ あなた方がすべての国々の難民や犠牲者とうまくやれることを望みます。あなた方がタイのJVCで活動して下さることも望みます。



- ① トンチャイ・クララムボン
- ② 1955年4月17日
- ③ タイ
- ④ 1983年5月1日
- ⑤ JVCに入る前はSiraエンジニアリングで働

いていた。

- ⑥ JVCのプログラムが難民と貧しい人々を助けるためにあるから。
- ⑦ 運転手
- ⑧ 良いプログラムだと思う。しかし、不思議に思うのは、何かそのプログラムに問題点が生ずると、打ち切ることがある点である。それよりももっと話しあって問題点を明らかにする努力をしてほしい。
- ⑨ JVCが引き続き、世界中の難民と貧しい人々を助けるために働いてくれることを望んでいる。そしてJVCがタイの農村に対するプログラムを組んでくれたらと思う。なぜならば、タイの中には援助を必要としている場所がいくつかあるからだが、もし可能ならば、私がお仕事をしてみたいと思う。
- ⑩ 他の国のメンバーについてはよく知りません。

# サヘルを緑に

サヘルの会代表 高橋一馬

## アフリカへの道

### 小さな外電

サハラ砂漠を緑にしたいと思い始めてからもう20年近くになる。きっかけとなったのは、インドで餓死者が出たという小さな外電だった。「あんなに大きく、雨量も多く、暖い国で、何で食うものが足りないんだろう」と不思議に思った。そして注意して見て行くと扱いは小さいが、かなり頻繁にそんな記事が報じられていたのである。ただ自分の中に見る眼が開かれていなかっただけのことだ。世の中がどう変化しようと、人類が地球上に存在する限り、「食べる」ということは不変である。その食べる物は、21世紀初頭には、人口の増加に食糧生産が追いつけず、世界各地で飢餓状態が発生するという予測もされていた。

これだと思った。この食糧の生産、つまり農業という分野でなら自分の特技や性格からしても、将来に何らかのことが出来そうだった。ではどこでやろうか。アマゾン河流域やボルネオのジャングル地帯か。水も温度も土地もあるし。アフリカもあるな。アフリカのサハラ砂漠はその昔緑に覆われて、農耕も行われていたという。それが砂漠化が進み、今なお拡大の一途をたどっている。よしサハラ砂漠を緑にして、農耕を行えるようにしよう。飢死するようなインドの人や他の国の人々がそこに移り住み、食糧生産を行い、予測される食糧危機にそなえようと、その時思った。このことを思い立った時、本当に武者ぶるいが2～3日続き眠れなかった。その後も“サハラを緑に”と思う度毎に高ぶってふるえが止まらなかった。

この大きな山にたどり着くにはどうしたらいいのだろうか。必要とすべき知識や技術のことを思いめぐらすと、余りのぼう大さに気が遠くなった。まず自分の生活を出直そうと、そのころ夜間高校の3年生だったが中退し、昼の高校に入りなおした。

卒業と同時に東京に出て仲間を探した。役所や政

治家の所にも行ってみた。当時（'69～70）のアフリカに対するイメージは暗黒大陸、猛獣狩りの域を出ず、誰にも相手にしてもらえなかった。「アフリカ開発問題研究会」という名前で貯金もしていたが、その金は翌年の大学入学のための費用に消えてしまった。

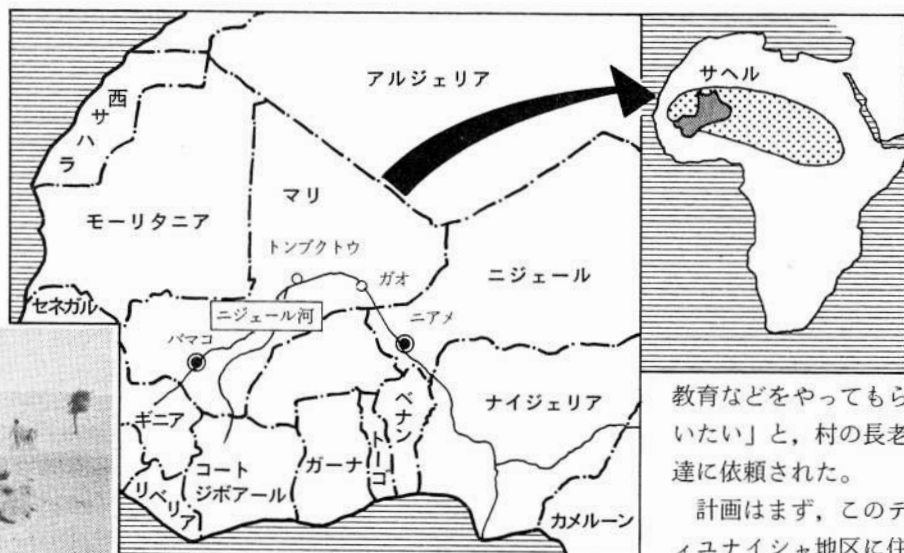
大学は東京農業大学の農業拓植学科と決めていた。在学中はバングラデシュ農村復興活動への参加、台湾で熱帯作物の研修、さらにブルドーザーの運転を工事現場で習ったりと、生活費確保と技術の習得に努めた。卒業後フランスの農家で2年間畑作有畜農業を学び、農業の方は何とかなれた気がしたが相変わらず資金がない。アルジェリアの日本企業で働いてもみたが、身体をこわしてしまい帰国せざるを得なくなった。リハビリをして体力も回復したころ、JVCのソマリアの話が先輩から転がりこんできたのである。ソマリアには当初1年という約束だったが、結局2年いることになった。ソマリアのできごとはいろいろ書いたのでここでは省略する。

### サヘルの会

昨年（2007）の2月末にソマリアを離れて、すぐに中央アフリカ共和国へ入り、農地確保をめざして動いた。その後、マリ、ニジェール、チャド等のサヘル地域を調査して9月末に帰国した。サハラの上空は前に一度飛んだことはあったが、地に足を下ろしたのは今回が初めてであった。マスメディアで報道される砂漠化現象の現状が、現地に入ったことで、実感できた。

古への都、トンブクトウも、まさに砂にのまれようとしている。その光影を目にした時背筋の凍る思いがした。ニジェールも同様で、84年の大干ばつで家畜の60～70%を失ったと言っていた。チャドでも砂漠化は進み、その上リビアとの戦乱も加っていた。調査旅行の最中でも、今何らかの手段を構じなければ大変なことになるという思いで一杯であった。

帰国してからも、なかなかふんぎりがつかなかったが、やはり大勢の人の力で考え、実際行動に移し



砂漠の井戸



教育などをやってもらいたい」と、村の長老達に依頼された。

計画はまず、このティユナイシャ地区に住

て行くべきであるという結論に達した。今回は自分の考えに賛同する仲間を得ることができた。そして彼らと共に準備を進めて行き、1月25日「サヘルの日」として発足したのである。

サヘルとはサハラ砂漠の南縁地帯を指し、今日でも砂漠は南下している。サヘルを緑の沃野に戻すことは、サヘルに住む人々ばかりでなく、地球の生態系の復元に役立つものだ。「サヘルの日」ではまず現地での食糧自給をめざし、少しでも砂漠化をくい止め、押し戻すことを試みる。その第一歩はニジェール河流域のトンブクトウ（マリ共和国）附近の灌漑農業である。これを植林と合わせて行いたい。

## 緑化計画

### ニジェール河さえあれば

トンブクトウから西へ約100kmの所にファギビンヌ湖という湖がある。昔は満々と水をたたえていたが、今では干ばつの影響とニジェール河からの導水部が砂に依って閉塞されたため、雨期になっても昔のように水が入って来なくなった。この湖の近くに遊牧生活を営んでいた人々が、干ばつの影響で家畜を失い、生活の糧をなくし、一部はマリ政府や国連の緊急食糧援助に頼って生活している。昨年6月の現地調査の折、「私達は、もはや昔の遊牧生活だけでは生きて行くことが難しいとわかった。私達も食糧援助に頼るのではなく、定着農業を学び、自給自足に向かって努力していきたい。もし日本のチームがマリで活動するならば、是非この地で農業教育、種子・農具・水の確保、栄養指導、識字教育、医療

む元遊牧民の人達に対して、干上ってしまったファギビンヌ湖の湖底を利用して井戸を掘り、ポンプを設置する。灌漑農業を行いながら、同時にすぐ湖の所まで来ている流砂を止めるため、農場周辺と内部に植林をする。また砂で閉塞した部分をもう一度掘り返してニジェール河の水を引き、その部分にも植林をしていく。というように、まず水に近い所から手を付けて行き、徐々にその輪を拡げて行くつもりである。サヘル地域に於ても食糧生産も、砂漠化防止のための植林も、結局「水」が鍵をにぎっている。豊富な水量を誇り、にごりを十分に含んだ西アフリカ最大の河、ニジェール河がある限りは出来るのである。

### にごり水の可能性

熱帯の大河は、ふつう乾期の時は水量も少なく、底がすけて見えるほど澄んでいる。だが雨期になると、流域に降った雨の大半は低い所をめざして集まり、地表部を洗い出す。濁った水が満々と流れ、時には大災害を起こしたりするが、その氾濫を利用して河口部では耕作も行われる。

この濁った水に含まれるものとして、粘土、シルト、家畜の糞泥、木の枝、ゴミ、有機質、昆虫の卵、小動物、病原菌など、さまざまなものが渾然一体となって存在する。この濁った水を汲み上げ、大地に灌漑することは、他の方法に比べてはるかに有効的である。他の方法とは、降雨にあまり期待出来ない乾燥地では二通り考えられる。

### <地下水の利用>

湧き出るオアシスを含めても量に制限があり、人

間や家畜の飲水量、生活用水、その周囲のオアシス農業ということにならざるを得ない。より多くの量をと、深井戸を掘って大量に水を汲み上げれば、その水脈につながっている他の地域に影響が及び、井戸が涸れるという現象が起こり得る。水質の点でも、土に含まれる無機質の他には期待出来ない。

#### ＜海水の淡水化＞

現段階ではプラントそのもの、運搬手段などが非常に高いものにつく。特に、サヘルのように内陸国だと海岸線からの距離も考慮すると、とても現実的とは言えない。これらの欠点のもう一つは水質である。地下水にしても、海水の淡水化にしても、その水には無機養分は含まれるが、地下水には若干塩分を含む場合がある。

#### にごり水の効用

単なるH<sub>2</sub>Oとしての水でなく、あのにごりの部分、時にはマイナスの要素を含む（病原菌なども含んでいたとしても）この“有機体としてのにごった水”こそが、砂漠化をくい止め、緑を甦えらせ、微生物も動物も生息可能ならしめ、ひいては自然生態系の復活につながると確信している。以下にごり水の効用について述べてみよう。

#### ＜通減の法則＞

必要用水量は、徐々に少なくてすむようになる。砂は粒子が粗いので、水を灌水してもすぐに地下部に浸透してしまう。これを防ぐために、昔は新しく作られた用水路で水もちの悪い所などには、米ぬかを水に溶かして流したり、もみガラや木炭をくわいて流し、粒子が粗くて水もれのする所へつまらせた（目つぶしという）。この目つぶしを行うことにより漏水を防いだという。

砂漠地では、水のロスが初めははなはだしい。しかしにごり水を灌水しつづけると、粘土、シルト、有機質などが砂と砂の粒子の間にひっかかったり、こびりついたりして、目つぶしが行われるので、灌

水する時間に比例してその効果は現れて来る。一定面積に仮に初め100lの水が要ったとすると、やがて98lで足りるようになり、さらに96lにと徐々に少ない水で間に合うようになる。そして少なくともすむようになったら、その分の水は隣接の他の地にふり向けることが可能となる。

#### ＜養分の補給＞

長期間にごった水を汲み上げることは、客土といって土壤の理化学性の改善や、肥沃度を増すのに役立つ。このことは四大文明がいずれも大河の流域に発達したことからもうかがえる。つまり定期的に氾濫することは、表面に集積する塩分を洗滌し、あのにごった水に含まれる養分で土地が肥え、高い農業生産力があつたからこそ、人も集まり、高度な文明も生まれたのである。

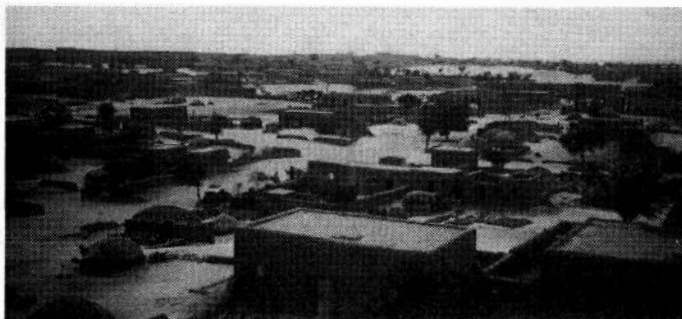
#### 植林の方法

にごり水の中には植物の種子なども含まれており、灌水を続けるとそれらが発芽して、その地にはなかった種類の植物も新しい地で育つことになるのだが、植林について少し述べてみる。

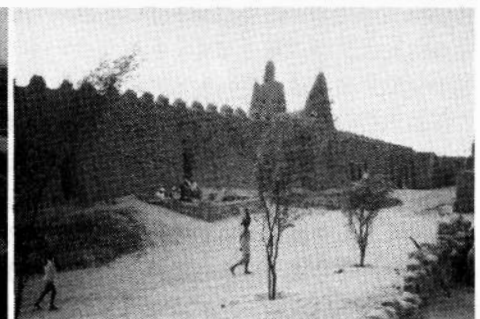
#### ＜混植が一番有効的＞

流砂を止めたり表面の土を風触から守るには、まず、裸地を植生で覆わなくてはならない。それには初めに生長の早いものを植えて行き、合わせてゆっくりとしたもの、中位のものも同時に植えて行く。生長が早いということはそれだけ養分吸収力が強いということで、それでなくとも養分のない土地から吸い上げると、他の植物が育たなくなるおそれがある。

次に出来るだけ多くの樹種をまぜて植えることである。ユーカリ、イビルイビル（ルシナ又はギンネム）などに加え、できるだけ多くの種類のものを同時平行的に植えて行く。むろんその中には、空中窒素固定能力のあるマメ科のものも取り入れていく。わかりやすい例で言えば、雑木林を思い起こせばよ



砂に埋もれたトンプクトウ





い。雑木林は少々の天然異変にも最も抵抗力は強く動物相も豊かだ。さらに立体的にも背の高いもの、中位のもの、低いものというように、空間を有効に利用し、地面には牧草や雑草が植えられる。

自然に復原力がついて来て、やがてそれらのうちから淘汰され、あるいは逆に上流からの水に混っていた種子から芽が出て、木に成長するのが最も良いのだが、初めは人間が手をさしのべて植林して行くことになるだろう。

#### ＜動物＞

にがり水を供給して植林をやって行き、木蔭が出来るようになると、人間も家畜もそこで休憩するようになる。家畜は糞をする。糞を分解するには微生物が活動する。またにがり水の中に含まれていた昆虫の卵や微生物、小動物なども、条件に応じてこの地で生命を帯び、活動を始める。家畜の糞のあるようなところにミミズが湧き始め、このミミズを食いにモグラやネズミが来出す。そのネズミ、モグラを取りにイタチが、イタチをねらってもっと大きな動物がというようになる。昆虫や鳥類でも同様のことが起こるはずである。

#### ＜降雨を呼ぶ＞

植林や、牧草、雑草など、とにかく植生で覆われた面積が広くなればなるほど水分の蒸発散量は多くなる。蒸発散量が多くなれば、水蒸気として雲となり、やがてはその場所に降るかどうかはわからないが、決ず降雨となって大地を潤す。そしてその地に植生が芽ばえ、又蒸発散して雲となり、次の雨を降らす。という様に、にがり水を汲み上げ、緑が多くなると、結果として雨を呼ぶことにつながる。

さてこんな風に人工的ではあるが、気象面でも植物も、微生物も、それまでにはなかった状況が作り出されると、一時的に、ある種の植物なり、微生物なり、動物が、すごい勢いで増殖して、他を圧倒することが予想される。しかしそれも一時的なもので、やがて他にとって替わられるということを繰り返す。

返し行われ、そのうち、ある一定のバランスに落ち着くことになる。その時に自然生態系も安定するのであるが、それは長い年月を必要とする。

## 多くの人の参加を

砂漠化防止のための植林にしる、灌漑農業を行うについても、専門的な知識や技術は大切なことは言うまでもないが、それにも増して重要なのは、現地の人の、文化、宗教、習慣や自然、気象などをよく理解する目を持つことである。

地元の人達がどういう生活をしているか、彼らの行動様式は、彼らの考え方は、また現地の自然環境などは、本やデータを見ただけではわからない。現地に住んで、地元民と一緒に生活してみて、始めてわかって来るのである。次のプロジェクトの計画等も、地元のペースに合わせたものでないとうまく行かない。それには相互理解が大前提であり、地元民からの理解なくしては信頼も得られず、協力なくてはプロジェクトはうまく行くはずもない。出来るだけ現地主義に徹してやらなくてはならない。その意味に於ても初めは小さなプロジェクトで、ゆっくりと時間をかけて周囲をよく観察しながら進めるべきである。そして、現地で考え、計画を立てて、実行して行くようにしたい。

私達の生活は、中流意識を持つ人々が増えていくことでもわかる様に、物質的には豊かになって来ました。しかし、エネルギー問題、人口問題、環境問題等、地球上の諸問題は解決されておらず、私達はその解決の方向性をさぐり、実現化して、次の世代に引き継がなくてはなりません。これは「今」という時を生きる私達の義務であると考えます。

1人では出来ないことも、大勢の力を結集すれば可能となります。どうぞより多くの方々の御参加、御支援をお願い致します。

なお「サヘルの子」の連絡先は以下のとおりです。  
〒120 東京都足立区東横瀬2-14-3-1F 高橋方  
tel: 03 (628) 7483

会費 5000円

郵便振替 東京7-115054 サヘルの子

銀行振込 富士銀行綾瀬支店

☎179-649064 サヘルの子

## 1月の動き

### 揺れ動く国境、カオイダン

各新聞誌上で既報とおり、昨年12月31日をもってタイ政府はカオイダン・キャンプを閉鎖した。現在同キャンプには2万4000人の難民が収容されているが、除々にタイ・カンブチア国境に移される。まず2月末に非合法入国者(500人)がサイトB(シハヌーク派)へ、3月にはRC(ration card保持者…第三国に出国できない)、彼らが済み次第FC(family card保持者…第三国への移住が認められている者の家族)が移される予定だ。

カオイダン・キャンプの閉鎖に伴い、JVCの技術学校の存続が心配されていたが、UNHCRは今年12月まで支援する(ただし要求額の80%)ことを約束

した。カオイダンに大きな動きがある場合は、遅くとも2カ月前までに各団体に連絡があるという。現在のところキャンプ内は平静を保っており、マスコミや訪問者に対しての“close”という面が強い。キャンプ内での制約は厳しくなると思われるが、UNHCRとしては例年同様、計画案を12カ月単位に動かしている。

タイ・カンブチア国境に関する情報は日々変化している。2月10日付の『Nation』社説によれば、クメール・ルージュ管轄下のカンブチア人2万9000人が国連の配給が中止される事態に直面しているという。クメール・ルージュが国連職員による食糧配給の監督を拒否しているのがその理由だ。

### 「サヘル」設立総会

高橋一馬さんの長年の夢が、今歩み出しました。この計画は「サハラを緑にしたい」という遠大なもので、高校生の頃から高橋さんが胸に抱き続けて来たものだそうです。'84~'86年のJVCソマリア難民キャンプでの仕事ばかりでなく、2年間のフランス滞在、フィリピンでの稲作研究、バングラディッシュでの熱帯農業の体験など、高橋さんの足跡は全てこの夢の実現に向けて準備してきたものだと言えなくもないようです。

1月25日(日)、午後1時より文京区民センターで、「サヘル」の設立総会が開かれました。25~30人位しか人が集まらないのではないかと、という主催者の心配は嬉しいことにはずれ、当日は80余人の出席を数えました。前日新聞に載ったということもあって、農大や農工大の人ばかりでなく、主婦や会社員、公務員など様々な顔が集まりました。第I部は総会で「会」の説明やプロジェクトの紹介、第II部は世話人会の発足集会、そしてその間に劇団JVCのパントマイムが入るといった流れでした。「みんなで同時にスタートしたい」という高橋さんの考えで、実際は手づくりらしい会の運びとなったようです。1人1人自己紹介をしてもらっているうちに時間が足りなくなって、実質的な内容についての話し合いが出来なかったとか。II部に残った人全員(40人)が世話人になったそうです。なにしろデッ

カイ計画ですのであせらずにやって欲しいと思います。

具体的なことについては、T/Eの本文にある高橋さんの「サハラを緑に」を読んで下さい。高橋さんの考えでは、マリ政府の要請があったとは言え、まだ公式な契約をしたわけではないので、6月に再度マリに飛び、正式な形に整えたいそうです。また9月をメドに、現地に宿舎や倉庫を建てることから始めるとのことです。(吉武)



### 山賀望幸さん逝く

1983年10月から84年7月までソマリアのルークで農業指導をされていた山賀望幸さんが2月9日午前3時、肝臓ガンのため逝去されました。享年44歳でした。

山賀さんはタンザニアで農業指導されることになっていましたが、昨年ガンが発見され、療養を続けていました。志なかばで倒れることになってしまい、御冥福をお祈りします。



### シーナちゃんの成人式

1月15日、成人の日、ポウ・シーナちゃんの成人式でした。前日から彼女の家にお邪魔して、翌朝5時30分に起きて2人で美容院へ行き、シーナちゃんのふりそで姿の出来あがりです。この日は晴天の上、風もな

く良い成人の日となりました。川口市のグリーンセンターでの式の後、シーナちゃんのお母さんの働いている病院とシーナちゃんの父親ともいえる池袋にいらっしゃる斉藤さん御夫妻を訪れました。

病院では寝たきりのお年寄が涙を流して喜んでくれたのが印象的でした。私も自分の着物が(たんすの中に眠っていた)シーナちゃんの美しい姿となって再現されて、心から嬉しく感じました。彼女は日本ではまだ高校一年生ですが、これからも勉強に励んで日本の社会にとけこんでいってほしいなあ、と思いました。 谷崎 裕子

### スポンサーになって下さい

JVCではバンコクやその周辺スラムに住む子供たちを対象に奨学金を給付しています。いったん就学しても教材や制服を購入する費用が足りなかったり、家計を助けようと中途退学をしてしまう子供たちが多いからです。対象となる子供たちは必ずしも成績優秀者ではなく、家庭環境や、本人の勉学の意志を尊重しています。

現在スポンサーの入れ替えが多く、来年度は50人分が不足する見込みです。ぜひこの子供たちのスポンサーになって下さい。

奨学金は1年間1万2000円(8月以降の受けから1万5000円)、支払いは一括払いです。できれば対象者の子供が卒業するまで続けて下さい。

また奨学金とは別に金額を問わない基金への援助もあります。詳しくはJVC東京事務所内、タイCD担当(岩崎)までお問合せ下さい。募集要綱をお送りします。

#### 送金先

- 〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5F  
JVC東京事務所内「デッグ・スラム奨学金」係
- 郵便振替口座：東京9-27495：JVC東京事務所

### お知らせ

#### 日本国際保健医療学会 第2回総会

4月2日(木)

9:30 開場

10:05 映画「自立への助け——赤十字の国際救援」  
「尾根と山峡の人々」

11:20 基調講演 佐々 学

12:00 昼休み

13:00 総会

17:20 特別講演 Dr.Krasse

18:00 閉会

4月3日(金)

9:45 映画「バングラデシュの人々とともに」  
「新しい国民医療を求めて」  
「国際医療協力」

11:20 特別講演 Docteur Francis Charhon  
(MSF総代表)

12:10 昼休み

13:10 一般演題

14:20 シンポジウム

「日本の国際医療協力の反省と展望」

座長 山本俊一、今川八東

演者 黒住 格 「NGOの立場から」

中島 宏 「WHOの立場から」

川原啓美 「国際協力におけるもう一つの試み」

和泉真蔵 「国際医療協力と国内研究体制の整備」

日比野路子 「タイの看護教育プロジェクトに参加して」

会場 朝日新聞記念会館 有楽町朝日ホール

東京都千代田区有楽町2-5-1

TEL:03(284)0131

会場費 会員 4000円 学生 2000円

非会員 6000円

〔当日会員登録をした方は会員とみなします〕  
年会費 一般 5000円 学生 2500円

是非とも皆様の御参加をお待ちしています。

詳しくは下記にお問い合わせ下さい。

〒307 茨城県結城市大字結城 10745-24

城西病院内 国際保健医療学会事務局

TEL:02963(3)2111

## 友だちはどこにでもいるさ

嶋田三芳

シェーク・ダヘルを囲んで（中央が嶋田さん）



### □頑張れ！シェーク・ダヘル

農場からの帰途、またしても機嫌をそこねたランクル（トヨタ4WD車）を3人で押し始めた時だった。「ハゲ ウ ソータ？（どこへ行くんだ）」とシワガレ声が背後から近づいてきた。何と例の御仁、ソマリア人にしては珍しい太っ腹の古老、シェーク・ダヘルである。この紙面にも何度か登場したことのあるJVC農場の地主のひとりで、「あれが欲しい。これをくれないか」と要求を続々と出しては、スタッフを悩ませてきた。そんな彼だから、「ちょっとルークまで行きたいんだが、乗せてってくれんか」と言い出しても、何ら不思議なことじゃない。「車は動かんよ！エンコしちゃった」と機先を制したら、「わかった」と今来た路をスタスタと戻って行った。

それから10分とたたないうちに、一団のソマリア人が僕らの方に突進してくるではないか。「何だ、ありゃー？」と顔を見合わせた。シェーク・ダヘルが地元民や難民をかき集めて来たのだ。十人力とはまさにこのこと。

しかし、70過ぎのシェーク・ダヘル翁よりもさらにガタのきているランクルのエンジンは、押ししても押ししても、一向にかからない。揚句、「ワシに任せろ」とシェーク・ダヘルがハンドルを握ることになった。彼の生涯で、最初にして最後のことだろう。ブブブッ、ヨロヨロ、ドスンッ。かん木に突っ込んで止まった。にもかかわらず、エンジンは回り続けている。シェーク・ダヘルじいさんのように。

### □ありがとう、お巡りさん

お巡りさんを好きな人は、多分、どこの国でも少ないだろう。ルークでは皆無に近い。特に警察署長ゴロハン氏は、まったく始末に終えない存在である。地位と権力をかさに、「車をくれんか。ポンプでもいい」と恥ずかしげもなく言う。難民キャンプを装甲車で急襲し、有無を言わず難民を連行するシーンを僕は2度も見た。だから、ライフルを肩に難民キャンプを警護している“お巡りさん”も僕は

嫌いであった。

そんなある日、10月上旬の暑い日だったろうか、2人のお巡りさんが僕に近づきながら、バズーンと2発、ライフルを発射した。土地調査のために、灼熱地獄を朝から10km以上も歩き、やっと難民キャンプの近くに辿り着いた時、この事件が起こった。「マハーッ！（何だ）アブディジョーフ」バテギみの僕を尻目に、そのお巡りと何やら話していたJVCソマリア人スタッフを呼び寄せた。事情をきくと、対岸にいるJVCスタッフに僕らの所在を知らせるために発砲したのだという。ホッと胸をなでおろした。かつて同様の状況に陥り署長ゴロハンに油汗をしばらくされた同僚がいるからだ。

僕らの傍に来たお巡りさんが「ワシの家に寄って休んでいかんか、たいへん疲れているようだから」と誘ってくれたのだ。予想だにしていなかったことだ。初めて足を踏み入れたアリマタン難民キャンプ。美味しいスパデティ。疲れ切った体をいやしてくれた草編みのベット、ジュバの水。そして何よりも、お巡りさんのやさしさ——報酬を求めずとも何かを期待するでもなく、路傍で困っている者がいれば、たとえ見知らぬ者でもあれ手助けしようとする心根に僕の心はいやされた。

### □涙のシェーク・ダヘル

「トキタ、話しがあるんだ」とシェーク・ダヘルじいさん。「またかよ。何を要求してくるのかな」と推理しつつ、じいさんの待つ木陰に向かった。

ところが、である。両眼を真っ赤に染め、今にも大粒の涙をこぼしそうに「なぜワシの家にお前の嫁さんを連れて来なかったんだ。ワシとお前は兄弟じゃないか」と訴えてきた。「じいさんの具合が良くなかったし、オレの婚約者は2日しかルークにいなかったんだよ」と僕。「しかしな、ワシは残念なんだ。お前の嫁さんにワシの山羊を1頭食べさせてやりたかった。……」

二人の頬を涙がつたい、乾いた大地に消えてゆく。

# JVCプロジェクト

1987年1月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	<p>渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報等。</p> <p>機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。</p> <p>JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～9時 第3土曜日 午後1時～4時 学習会 第4月曜日 午後6時～9時</p>	全国社会福祉協議会	<p>岩崎駿介(代表)</p> <p>星野昌子(事務局長)</p> <p>柴田久史, 佐々木志保, 加納 妙, 前川昌代, 佐久間典子, 古西 勇, 鶴田三芳, 岩崎美佐子, 富安光子, 村田恵子 他</p>
日本国内	<p>●日本語家庭教師</p> <p>神奈川県ボランティアもオリエンテーションを受け、徐々に活動に入っている。平塚、藤沢方面のボランティアが不足しているのので、再度募集する。埼玉県でもボランティアが不足しているのので、2月以降に募集し、オリエンテーションを行う。</p> <p>1月22, 23日に飯田橋の東京都青少年センターにおいて「定住難民フォーラム」が行われた。官民情報交換の場として意義があった。</p> <p>しばらくお休みしていた地区別ミーティングが再開される。機関誌『そんぽっと』を発行中。</p>	<p>ジャパン・タイムズ</p> <p>神奈川県福祉部</p> <p>国際婦人福祉協会</p>	<p>森山久寿子,</p> <p>地区連絡係10人</p> <p>他約50人</p>
エチオピア (ウォロ州)	<p>●総合的復興促進</p> <p>マーシャに深井戸を2基掘る作業が、現地政府の機関の協力のもとに開始された。料理、家庭菜園の指導を含んだ栄養教室も、低体重児を持つ家庭を中心に行われている。</p> <p>種子銀行は来季に向かって準備中。モデル農場ではアグロフォレストリー用の樹種の育成実験と現地農法での農業を実施している。</p> <p>●植林</p> <p>7月の植樹期に向けて第1苗床、第2苗床で苗木生産を行っている。</p> <p>●農業</p> <p>種子銀行では来季への準備のため、現地で種子を集めている。モデル農場ではアグロフォレストリー用の樹種が育成中。現地小学校と共同農業教室を始めることになった。</p> <p>●保健・栄養</p> <p>料理・家庭菜園を含んだ母子栄養教室が行われ、教室建設も進行している。</p> <p>●給水</p> <p>2基の深井戸を掘る一方で手掘り井戸も実験中。</p>	<p>CRDA, 西本願寺, チャリティ・カレンダー,</p> <p>チャリティ・サイクル, メリノール修道士会, 全老連, バンド・エイド, 日本漫画家協会</p>	<p>内山田 康, 林 達雄,</p> <p>伊藤達男, 伊藤幸子,</p> <p>久田信一郎,</p> <p>イエットベルク, ソロモン, バレタ, フェテルワルク, ダニエル</p>

<p><b>ソマリア</b> モガディシュ 事務所</p>	<p>渉外, 事業計画, 会計, 総務。</p>	<p>UNHCR R.I. ジャパン 創価学会文化・ 平和運動事務局 ジャパン・タイムズ</p>	<p>嶋 紀晶, 浜野敏子, シアッド</p>
<p>マガネイ・キャンプ (ゲドー郡)</p>	<p>●農業による自立促進/定住 昨年11月に作付したメイズ, ソルガム, 野菜等の収穫を終え, 土壌保全の目的も兼ねてデゲル(豆類)を播種した。農地の拡張工事は, 3月末の完了をめざし, 追車をかけている。 また, マクドール地区に依然として残留している難民に対しては建設的な対応ができていない。</p>		<p>荻ノ迫善六, 樫田秀樹, 法橋 亮, 船川秀夫, 五十嵐裕昌, モハメッド, ラシッド, ハジ, アオキ, アブディ・ジョフ, フセ イン, アハメッド, ハッサ ン</p>
<p>ジャボレ・キャンプ (ヒラン郡)</p>	<p>基本的方針として, 各プログラム間の連繋を強め, より総合的なものとしていく。 ●医療・保健/補助給食 さらに RHU(ソマリア政府の医療機関)の協力を求めていく。 ●植林 4ha拡張分の苗木を育苗中。 ●インカム・ジェネレイティング(難民が現金を得るためのプロジェクト) 最終的に4台のドンキー・カート(ロバ車)を貸しつけた。また1月に開店したパン屋は非常に好評で, 1日に600個が飛ぶように売れている。 ●教育 教室の建設を終了し, ソマリア政府等の関係団体との交渉も山を越した。 ●家庭菜園 配布した野菜は成育中。給水はドンキー・カートで行っている。</p>	<p>朝日新聞厚生文化事業団 モラロジ-MIRC 仏国土をつくろう会 砂漠に種をまく人の会</p>	<p>掛村 均, 米澤 聡, 中路美和子, 庄司 美, シュクリ, ハッサン, アブディ, シュイク・ アブディ</p>
<p><b>カンブチア</b> (ブノンベン カンダール省 プレイベン省 スバイリエン省)</p>	<p>●カンブチアの人々への総合的人道援助 建築中の救援のためのワークショップ/技術学校は3月末か4月初めにオープニングを予定している。11月中にユニセフ・ブノンベンと補助栄養給食プログラムにおける協力を合意。87年度には人材(医療・栄養)を派遣する予定。 ブノンベン市に芝刈り機, ゴミ箱用の資材を提供。OXFAMと共同で井戸掘りも行っている。 1. 救援のためのワークショップ/技術学校 2月中に建築完了。4月2-9日開校予定。 各支援団体の訪問を申請中。 2. 井戸掘り/給水 プレイベン州で継続中(OXFAMと共同) 3. ブラック・ピノウ孤児院援助 男子用宿舎, 手工芸室, 浴室の補修・建設完成。 トンレ・サップ川からの水浄化システムを計画 中。 4. 補助栄養給食 1987年度からUNICEFと共同で栄養不良の子どもたちを対象に行う。人材も派遣する予定。 5. ブノンベン市公衆衛生局への協力 同局のクリーンナップ・キャンペーンに協力し, 芝刈り機, ゴミ箱用の資材を提供した。 6. クメール古典舞踊学校支援 今年度計画のため申請待ち。</p>	<p>日本青年会議所 ・関東地区協議 会, 平和基金, 自動車労連, 庭 野平和財団, 全 老連, 創価学会 文化・平和運動 事務局, モラロ ジ-MIRC, 立正佼成会</p>	<p>熊岡路矢, 箕田健一</p>

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
タイ	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報、バザー、古本のセール。季刊『ニュース・レター』（英語・タイ語）発行。	全国社会福祉協議会	ボンビモン・チャイブーン、カモン・ミンムアン、クリッサダ・タウイバサ石原淑子、他約10人
カオイダン (カンブチア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 UNHCRより今年度12カ月分の予算を得られることになった。形式上は閉鎖キャンプとなったが、当分現状のまま続くものと予想されている。 19日より新学期が開始され、737人の生徒を受け入れた。31日には身障者を学校に受け入れることに関し、他団体と協力して先生たちへ講義を行う。	UNHCR R.I. ジャパン	熊木政江、谷山博史、矢野和貴、ソムヨット・ラタナタム
国境のサイト2、 ノンチャン (カンブチア 難民村)	●補助給食 1月26日、Site 2 始まって以来の砲撃を受け、9人のクメール人が負傷した。その後5日間救援団体の立ち入りが制限されたが、JVCは病棟への補助食配給のためキャンプ内で活動を行った。	WFP/UNBRO	テリース、ブーム、トンチャイ、スリベン、ソムボン、スピチャ、エンドリアン、ソムサック
バナニコム (第三国定住待ち 難民一次収容施設)	●文化オリエンテーション ・日本定住予定者 ①日本語学習の基礎(読み、書き、聞き取り) ②日本語の日常会話の習得 ③日本に関する概略的な理解を促す ④渡航に必要な事柄への理解と実習 ・日本以外の国への定住予定者に手続きの理解を深める。 ●子供レクリエーション・プログラム 一般生活常識を通して自然科学の基礎を教える。	天理教千葉	浜崎妙子、大場きみよ アナン・ブッタミリンパティ 落合正幸、関根慶三
地域開発 (バンコク市内の スラム地区)	●奨学金援助 スラム在住児童が小学校(6年間)を卒業できるよう援助している。本年度の対象者は10のスラムで16校250人。 ●クロントイ図書館 クロントイスラム住民の就学前児童から成人までを対象としている。12区における新図書館建設のため、NHA(住宅公社)と交渉中。 ●移動図書 ラプレー、ナンシーのスラムで子供向け図書を中心に回覧。 ●移動学習センター(プラティープ財団、FFSC、JSRCとの共同プロジェクト) 9のスラムで学習の機会のない子供たちのため人形劇などで教育を行っている。 ●再定住 ラッカバン地区において再定住したバンコク市内のスラムの人たちへの資材援助(長期資金貸与方式)。	モラロジーMIRC、 NTV、JOFIC 庭野平和財団 京都国際青年委員会	ヴァラナート・チュンクン、 サムルエイ・ジョンヨー クラン、アルニー・スニ ット・ムンナイ、リーラ ・クンナロン、スワン・ リンサムベン、コメイ ン・スンサマラ 佐藤正喜
人材派遣プロジェクト			
フィリピン (PFAC, パラワン島)	●国際移民委員会(ICM)一第三国定住手続きにともなう医療業務及びキャンプ内でのプライマリ・ヘルスケア。	城西病院	青井千恵

## JVCの活動とその目的に御理解を

▶**JVCとは**—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶**JVCの会員募集について**—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円  
 団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶**機関誌「Trial & Error」のみの購読について**

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶**送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京 5-48365 加入者名—JVC 会員係
- ②T/E：東京 3-54186 加入者名—JVC 東京事務所  
 (住所、氏名、購読開始月をお書き添下さい。)

▶みなさまの募金が支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. **アフリカ難民救援募金** (1月小計 35,233円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. **インドシナ難民救援募金** (1月小計 5,000円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- C. **カンブチア募金** (1月小計 19,000円) カンブチア国内の復興のために使われます。
- D. **クロントイ・スラム募金** (1月小計 12,500円) バンコクのクロントイ・スラム内の図書館の運営およびスラム立退き者のための建築資材購入費に使われます。
- E. **デッグ・スラム奨学金・基金** (1月小計 105,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- F. **日本語家庭教師募金** (1月小計 6,523円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- G. **医療募金** (1月小計 1,000円) 緊急事態が発生した場合、速やかに医師を派遣したり、医薬品などの緊急救援物資を輸送するために使われます。
- H. **ボランティア募金** (1月小計 1,500円) 現場で活動続けるボランティアの健康管理費にあてられます。
- I. **JVC 運営経費募金** (1月小計 0円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. **無指定募金** (1月小計 189,022円)

▶**送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。  
 東京 9-27495 (募金種目名をご記入下さい。)  
 加入者名—JVC 東京事務所

## 編集後記

▶外務省から「不要不急のカンボディア旅行は差し控えるように」という通達文が出された。アンコールワットへの旅行に関して安全を保障できないというカンブチア政府の声明を考慮したものだ。「アレレ…」と思って読み返したら納得できた。声明文を出したのは国境にいる連合政府であって、プノンベン側ではない。これはまさに連合政府の威嚇だ。なぜなら私たちはベトナム経由でしかカンブチアに入れない。連合政府に安全を保障してもらった旅行など初めから無理なのだ。しかし8つのキャンプ地しか持たない政権も、通達文を通すと1つの国家に見えてくる。日本政府は一方を無理に見ようとし、片目はつぶっているようだ。



昭和62年 2月20日発行 (毎月20日発行)  
 編集人 前川 昌代  
 発行人 星野 昌子  
 発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所  
 〒113 東京都文京区湯島 3-1-4 会田ビル 5階  
 電話 03 (834) 2388 Telex: 2323187 JVCHQ J

バンコク事務所 JVC THAILAND  
 29/3 Soi Saengchan, Sukhumvit40,  
 Rama 4 Road, Bangkok 10110.  
 電話 391-1117  
 Telex: 87032 COMSERV TH

ソマリア事務所 JVC SOMALIA  
 c/o UNHCR P.O. Box 2925  
 Magadishu,  
 Telex: 794 HICOMREF SM

エチオピア事務所 JVC ETHIOPIA  
 P.O. Box 6941 Addis Ababa  
 カンブチア事務所 JVC KAMPUCHEA  
 203 Monorom Hotel Phnom Penh  
 Letter: c/o ICRC, P.O. Box 11-1492  
 Bangkok.

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

\*本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

定価 送料共 300円